

地球市民的コミュニティ開発 — 幸梅（こうめ）プロジェクトの実践事例より —

藤掛 洋子

Global Citizen's Community Development Practice: A Case Study of Koume Project

グローバル化が深化する今日の社会において、国内外の格差拡大は歯止めがきかなくなってきた。今を生きる私たちは、新自由主義的な、あるいは金融資本主義的な価値観を乗り越え、連帯経済的価値観や思考を持ったくらし方、生き方を模索することが急務であると考え。また、私たちひとりひとりができる地球市民的な日常実践を紡ぎ出していくことが必要であると考え。

本稿は、東京家政学院大学学部学生を対象に展開している NPO / NGO 論とコミュニティ論を中心とした授業の中で生み出してきた地球市民カリキュラムと「幸梅（こうめ）プロジェクト」の実践事例を紹介する。これらの演習や講義を通し、学生たちがどのような学びから地球市民的価値観を身につけ、地球市民的实践をはじめたのか、これらの実践は地域や地球社会に還元できる可能性があるのかを分析する。また、ひとりひとりができる日常実践の可能性や大学教育に求められるものについて考察する。

Key words : Global Citizen's, development education, gender perspective, PCM, community development

1. はじめに

国際協力や地域開発で用いられる PCM (Project Cycle Management) 研修を、国際協力の実践経験のない学部学生対象にはじめて実施したのは、東京家政学院大学であり、2004 年度のことであった（藤掛他 2008）。

2007 年度～2008 年度は、私立大学等経常費補助金特別補助教育・学習方法等改善支援を受け、PCM 研修にジェンダー視点を取り入れるための教材開発の試みを行った（ibid.）。教材開発の発端は、2004 年度に実施した PCM 研修に対し学生たちが提示した疑問、すなわち、「ジェンダーの問題について考えたいが、PCM の現行の枠組みではそれが十分にできない」という問いかけであった¹⁾。

2008 年度においた力点は、研修で培った学び

をどのように実践に結び付けることができるのか、であった。2007 年度に開発した「ジェンダー視点にたった PCM 教材」を用い研修を実施した後、学生たちと地域へ飛び出した。東京家政学院大学多摩キャンパスの回りにはどのような歴史があるのか、地域開発はどのような歴史的経緯の中で行われてきたのか、そこに住まう人々は自分の居住する地域にどのような意見をもっているのか、近くて遠い東京都町田市相原（以下、相原地区）を自分たちの足で歩き、インタビューを行ってきた。同時に、先進国で生きる私たちが地球市民として生きるために何ができるのかを考えてきた。

学生たちは、「国際協力と家政学」や「NPO / NGO 論」、「コミュニティ論」、「子どもとコミュニティ」などの授業や演習を通し、限りある地球資源を大切に、ジェンダー視点を有しながら生きていくための方策が必ずあると確信し始めた。そ

して、南北格差を考える過程において、地球上の全ての子どもたちが「子どもの権利」を行使する、すなわち義務教育を終えるために自分たちにできることがあるのではないかと考え始めた。

2008 年は町田市制 50 周年と重なったことから、相原地区の方々よりコミュニティ開発や地球市民として生きるための実践的な教室；梅山での小梅採り、幸梅（こうめ）プロジェクトの実施、相原ふれあいフェスタへの参加、町田市制 50 周年記念行事の一環としてのチャリティ・コンサートの開催などに身を置く機会を与えて頂いた。学生たちは、「幸梅プロジェクト」の計画・立案・実施を中心に、あらゆる角度から真摯に地球市民的实践を考え、実行してきた。

梅栽培農家の支援を得、手作り梅干しを作り、販売を手掛ける案は、PCM 研修においてシュミレーションし、議論してきたことであるが、教室の中での模擬授業が具体的なコミュニティ開発や地球市民として生きるための日常実践に具体化したことは一教員として、そして一人の人間として感慨深いものがある。小さな一粒ではあるが、この一粒が目を出し、花開き、幹を太くし、いずれ、そして必ずや世界を変えることにつながると考えている。

以下では、2 章において筆者が展開している「グローバル化と私たちの暮らし」に関する授業（「国際協力と家政学」、「NPO/NGO 論」、「コミュニティ論」、「子どもとコミュニティ」などの講義・演習）の概略を示し、3 章で学生たちの地球市民的实践例を示す。4 章では、このような実践が学生自身にどのような心の変化をもたらしたのか、学生たちの生の声を掲載する。最後に、一人ひとりの地球市民的日常実践がどのような国際貢献につながるのか、大学の役割とは何であるのかについて検討する。

2. グローバル化と私たちの暮らし

グローバル化の中で私たちの暮らしが直面する課題を一言で説明することは不可能である。1 年生の基礎ゼミから、大学院までの教育の中で、学習の進度に合わせ、開発人類学、「ジェンダーと開発」論の中で筆者が援用したり、再構築してき

た理論をブレイク・ダウンしたものを組み合わせ、学習教材として提示している。表 1 は、筆者が担当している授業科目（2008 年度分）であり、印のついたものが、特にグローバル化と私たちの暮らし、世界の暮らし、国際貢献などに結びつけて授業を展開しているものである。ここでは、人々の暮らしといのちの豊かさ、平和とジェンダーと開発などに力点を置いているが、多方面からのアプローチを採用し、複眼的に社会を分析する視野を涵養することを目的としている。大学で学ぶことの意義はその点にあると考えるからである。

表 1 地球市民的カリキュラム

	前期	後期
1 年生	★基礎ゼミ(ジェンダーや南北問題などの基礎を学ぶ) ★家庭経営学概論(輪講)ワークショップの実施：パーム油から世界を見る	ジェンダー論
2 年生	★国際協力と家政学 ★NPO/NGO 論	★コミュニティ論
3 年生	女性問題研究 ★家庭科教育法 総合演習（インターンシップ）	★子どもとコミュニティ 家庭科教育法 生活総合研究（輪講）
4 年生	卒業研究 A	卒業研究 B
大学院	★生活経営学特論	生活経営学特論演習 A 生活経営学特論演習 B

* 2008 年度分

2-1. 導入編：南北格差を疑似体験

1 年次には、基礎ゼミにおいて、導入としてのジェンダー問題と南北問題について触れる。その後、家庭経営学概論で、グローバル化の中の私たちの暮らしについて、「パーム油の話—地球にやさしいってなんだろう」（開発教育協会：Development Education Association and Resource Center, DEAR）などの教材を用い、DEAR YOUTH メンバーの協力も得て、ワークショップを 2005 年度より実施している。

日本では「地球にやさしい」というイメージのもと、洗剤や石鹸にも使われているパーム油の輸

出が、森林伐採による熱帯雨林の減少や、先住民の生活環境の破壊、児童労働などの問題を引き起こす点をワークショップ形式で学ぶことから、日本という「豊かな」生活の裏にある世界のことを体感してもらうことがねらいである。

90 分という限られた時間の中でのワークショップでは、パーム油の課題を論じることはできるものの、パーム油が持っている産業としての可能性にまで言及することは困難である。また、ワークショップの素材を創り出していく過程で、対象社会で生起する事象を単純化してしまい、複眼的な視野をそぎ落としてしまうという難点があるが、ワークショップ自体にあることも承知している。しかし、1 年次の導入教育という位置付けから、まず南北格差を体感してもらい、思考を開始することが重要であるという立場から、このような形式を採用している。なお、議論を単純化しないために、前後に講義や「ふりかえり」の討論を通し、南北格差や南南格差の問題は、歴史的、文化的、構造的な問題が複雑に絡みあっている点を補足し、偏った授業展開にならない工夫を行っている。

1 年次の導入教育の段階で、差別や格差の構造を体感し、これらの感覚が学生の意識や体の中に強く残っていることが、次のステップである展開編、すなわち理論編につなぐことが容易になると考える。ワークショップには課題があるものの、導入時における教育手法として今後も継続する予定である。

2-2. 展開編：グローバリゼーションと開発論を学ぶ

2 年次には、「国際協力と家政学」、「NPO / NGO 論」、「コミュニティ論」において、グローバリゼーションの正と負の側面を検討する。

グローバリゼーションという言葉がでてきたのは、1970 年代以降といわれている。グローバリゼーションの定義はその取る立場により多様であるが、以下のように定義されることが多い。

Globalization has been defined as 'the process through which an increasingly free flow of ideas, people, goods, services and capital leads to the integration of economies and societies' (Kohler 2002).

肯定派には、グローバル化により国際分業が進展し、最適の国や地域において生産活動が行われるため、より効率的で低コストでの生産が可能となり、物の価格が低下して社会が豊かになる、という立場のものが多い。このような国際分業に対して、フェミニスト経済学者のエルソン、ダイアンとピアソン、ルス (Elson, Diane and Pearson, Ruth) は、1981 年に出した 'Nimble Fingers Make Cheap Workers: An Analysis of Women's Employment in Third World Export Manufacturing' の中で、発展途上国の女性たちが「器用な手」を持つ存在として、当該国と国際機関と多国籍企業の三つ巴の関係の中で、「創り出され」安い労働力として「売り出されている」ことを指摘した。エルソンとルスは、国際分業とジェンダーの問題を初期の段階で指摘した研究者であり、後の「ジェンダーと開発」論に大きな影響を与えている。

グローバリゼーションの必要性を認めた上で問題を提起する代表的な研究者には、1979 年にジョン・ベーツ・クラーク賞、2001 年にノーベル経済学賞を受賞したアメリカ人の経済学者のジョセフ・E・スティグリッツ (Joseph E. Stiglitz) がいる。彼は、『世界に格差をバラ撒いたグローバリズムを正す』(徳間書店)の中で、「グローバル化が進むと富める者と貧しい者との格差が拡大せざるをえない」ので「社会全体で格差を埋めていく努力をすることが極めて重要である」と指摘する。

筆者は、エルソンやルス、スティグリッツらの立場を取りながら、「国際協力と家政学」では、発展途上国が直面しているジェンダー問題を、1960 年代以降発展してきた「ジェンダーと開発」論の枠組みの中で示している。詳細は、藤掛編著 (2008) で既に触れているので、本稿では割愛する。この授業では、家政学の枠組みを現代家政学へと再構築している点が特徴である。

現代家政学とは、家政学の知と「ジェンダーと開発」論の接合であり、発展途上国の貧困の女性たちの自立や連帯経済の可能性を開く学問でもある。金融市場主義ではなく、新たな豊かさを導き出す学問として筆者は位置付けている。現代家政学の視点から、具体的な地球市民的な実践を提示

できることが東京家政学院型の国際協力論の強みでもある。

NPO / NGO 論では、授業の導入において、「バナナと日本人」や「エビと日本人」、「ワールドカップと途上国の子どもたち」などをテーマに国際分業の課題と解決のための可能性を論じたのち、市民が考える国際協力について、国際 NGO や各種 NPO 活動および筆者が代表を務める NGO ミタイ（子ども）基金²⁾の事例なども交えて具体的な事例を紹介をしている。

また、新自由主義的な価値観の転換の必要性についても、金融資本主義の崩壊の後の世界経済を例に出しながら論じている。

2008 年 9 月 15 日に米国第四位の証券会社リーマン・ブラザーズが倒産した。米国はレーガン大統領時代から新自由主義政策を採っており、政府が市場に介入してはいけないという立場から、リーマンの倒産を容認し、その後、将棋倒しのようにウォール街の証券会社、銀行が危機に陥った（北沢 2008）。実体経済の 50 倍の規模ともいわれる投機資金（ヘッジファンドなど）の実態も明らかになり、米国の市場原理主義が、世界経済を脆弱なものにし、米国の低所得者のサブプライムローンの不良債権化という小さな事件を世界中を揺るがす大危機に発展させた。

今を生きる私たちは新自由主義的な価値観からの脱却を図り、連帯経済への模索が重要ではないかと筆者は考えている。連帯経済とは、大企業によるグローバリゼーションの結果、貧困化された人々が自らの手で営んでいる「もう 1 つの経済活動」であり、新自由主義による経済のグローバリゼーションが最大限利潤の追求を目指しているのに対し、連帯経済は、利潤ではなく、人々の間の連帯を原理とした全ての経済活動を指す（ibid.）。

この連帯経済には第一に、すでに 19 世紀から続いている協同組合活動が挙げられる。日本では、農協や 2,000 万人が加盟している生活協同組合が該当するが、一般には、生産者、消費者、それに企業や学校、博物館などまで経営する多岐にわたる経済活動である。

第二に、農村女性の農産物加工業、障害者作業

所、託児所、高齢者のグループホーム、商店街、町工場、その他あらゆる非営利の企業活動が挙げられる。

第三に、地域通貨、国内や南北間のフェアトレード、マイクロ・クレジット、農民漁民の協同組合など、主として途上国で取り組まれている草の根の経済活動がある。連帯経済とは、新自由主義的なグローバリゼーションに対抗する「もう一つの経済」と捉えられる（ibid.）。

このような連帯経済の重要性を「国際協力と家政学」の中で捉え直し、地域から発信可能な連帯経済の在り方を模索したのが、3 章で論じる幸梅プロジェクトである。

なお、「ジェンダーと開発」を基礎においた国際協力関連の他の授業では、ミース、マリアによる発展途上国における女性労働の諸形態の概念化（ミース 1997）が今なお有効であるという立場から授業を組み立てているのでここで補足する。

ミースは、先進工業国に拠点をもつ多国籍企業の、輸出加工区に設置された世界市場向け大規模製造業およびその下請け的工場における雇用労働者を現業労働（例：繊維、エレクトロニクス産業、衣料、玩具、100 円ショップ商品など）に分類し、半熟練、未熟練、若年の雇用（20 代前半）が特徴であると指摘した。輸出加工区（Export Processing Zone）や自由貿易区（Free Trade Zone）といわれる地域においては、女性や子どもが労働力として搾取されている点をミースは『国際分業と女性：進行する主婦化』の中で示し、資本主義と家父長制との間に必然的で構造的なつながりがあることを明らかにした。国際経済や国際開発をジェンダー視点から分析することの重要性は今日も増加していると考ええる。

例えば日本の場合、2006 年 9 月 9 日、ヘルシンキでフィリピンと日本の両国が EPA（Economic Partnership Agreement）に署名し、「両国間の物品、人、サービス、資本の自由な移動を促進し、双方の経済活動の連携を強化するとともに知的財産、競争政策、ビジネス環境整備、人材養成、情報通信技術や中小企業等の分野での二国間協力を含む包括的な経済連携を促進する事」、「人の移動」に関する合意事項：「一定の要件を

満たすフィリピン人の看護師・介護福祉士候補者の入国を認め、日本語等の研修終了後、日本の国家資格を取得するための準備活動の一環として就労することを認める」とした³⁾。このことは、ミースの指摘する国際労働とジェンダーの問題と構造的な部分でつながっているものであると考える。

図1は、ヘンダーソン(1987)が示した産業社会の生産構造である。ヘンダーソンは、産業社会の生産構造は、貨幣部門と家庭内労働や病人の看護といった非貨幣的生産部門に分かれ、GNPは点線から下の部分を考慮していない。しかし、このような「公認」されていない「非市場的な共同経済」、環境に吸収される外部費用ないし吸収されない外部費用を計測することが必要であると指摘している(1987)。

図1は、ジェンダーの視点から考えると、より非貨幣的な経済に近づく程に女性が担う傾向が強い点を指摘できる。また、グローバル化の中では、市場労働から離れる程に女性や「外国人」が安い賃金で労働を担うという構造が存在する。この点をどのように考える必要があるのか、グローバル化社会の中で再考する必要があると考える。

私たち日本人は、自国の食糧自給率は40%に満たず、食糧生産や、ケアなどの再生産労働を発展途上国の「安価」な賃金に頼り、グローバル化の中で「恩恵」を受けているかのように見える。しかし、立ち止まって考えると、私たちの暮らしはたして本当に豊かなのであろうか。全ての人々に平等な権利があり、尊厳を持って生きる権

利があるにもかかわらず、一部の人間のみが豊かになり、その豊かさの下で基本的人権や人間の尊厳を踏みにじられている。そのようなことを促進する経済構造について立ち止まってジェンダー視点も取り入れ、考える必要があるのではないだろうかと考える。

この点について学生たちに問うと、多くの学生は共感し、自分たちなりにでき得ることを真摯に考えている。

2-3. 実践編：暮らしといのちの豊かさとは

国際社会の問題を授業で取りあげると、「豊かな」社会で生きてきた学生たちにとって、一人ひとりのくらしや命(いのち)の大切さ、先進国の生活のゆたかさを自省することはできる。しかし、まだ遠い国で起きている自分たちには関係のない問題であるように思える、という声も聞かれる。一方、授業を受けて、発展途上国に飛び込みたいと強く願う学生がいても、学業を中断したり、卒業後すぐに途上国に行けるものは毎年、1-2名程度である⁴⁾。

そこで今、私たちが生活している地域で社会的な役割を自ら積極的に担い、地域や国際社会へ貢献できることはないだろうか、地球市民的な実践を身近なところからできることはないだろうか、という問いを立てた。

その手始めが、教室内でのPCM研修である(写真1~2)。発展途上国の農村社会に存在するジェンダーや開発の問題に対し、時間をかけて分析し、論理的思考を醸成する。

その後、フィールドに飛び出し、大学の近隣地域にある相原地区の現実を把握し、学生たちが取り組めること、対象地域の方々が受け入れてくれること、それらが地域や国際社会への貢献につながる

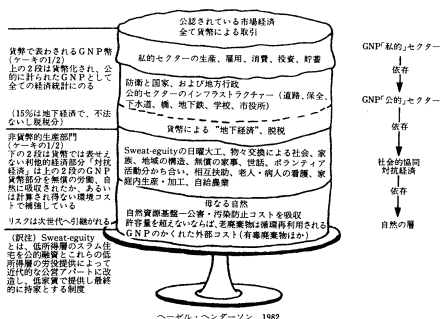


図1 産業社会の生産構造 (デコレーションつき3段ケーキ)
出典：ヘンダーソン (1987)



写真1 PCM研修



写真2 PCM研修

「かもしれない」と考えられることを持ち帰り、教室の中で議論した⁵⁾。

学生たちはインタビューを通し、相原地区の方と多くの出会いがあった。その中で、梅農家の方との出会いもあった(写真3)。農繁期に小梅の収穫支援(援農)の機会を与えて頂き、収穫後の小梅を100kg分けて



写真3
梅農家の方と打ち合わせ

頂いた。この梅を使い、相原地区名産の梅干しを作ってはどうかと地域の方から提案された。輸入ではない日本国内産、それも相原産の梅を使った小梅プロジェ

クトが発案されたのである。これは、わずかなことであるかもしれないが、フードマイレージを削減することにも貢献でき、地産地消にもつながる。微力ではあるが地域の活性化につながるかもしれない。学生たちの様々な思いが膨らみ始めた。

3. 小梅から幸梅(こうめ)プロジェクトへ

筆者は教員という立場から、小梅プロジェクトを試行錯誤の中、授業のカリキュラムに組み込み、学生たちと梅山に飛び出した。同時に学生たちも地球市民として、持てるものが、持たざるものへ支援することは重要なことではないかと考えた。もちろん、まだ、その時、学生たちの思考回路は、梅採りから国際貢献ができるということにはつながっていなかった。

しかし、自然の中で体を動かし、大地のエネルギーを吸収し、美しい小梅の香りを体一杯に吸い込んだからであろう。様々なアイデアが梅採りの中から出てきたのである。

小梅プロジェクトを幸福の梅、幸梅(こうめ)プロジェクトへと名称変更し、ミタイ基金を通して収益金をすべて、義務教育を受けることのできない南米パラグアイの農村の子どもたちに贈ることから地球市民的实践を行うことが決定された。また、ミタイ基金に学生部がないことを知り、ミタイズと学生自らが命名し、ミタイ基金学生部の活動を立ち上げた。

持てる立場にいるものが、教育などにアクセスできない人々を支援する、それが幸梅プロジェクトなのである。スティグリッツのいうところの、社会全体で格差を是正する、それは学生一人一人にもでき得ることではないかと、学生自身が考え始めたのである。先進国で生きる私たちにできることは何であるのかを考え続けてきたその成果でもある。

しかし、幸梅プロジェクトを立案しても、お客様の口に入るものを作ることに対し、学生たちには多くの緊張があった。以下では、相原地区の専門家の方より教示頂いた梅干し作りのプロセスを紹介する。

3-1. ホップ

5月、NPO/NGO論の授業にて相原地区の青木幸雄氏と青木恵里子氏をお招きし、小梅の採り方から梅干しの作り方まで教えて頂く。梅採りの経験のない学生がほとんどであったため、話を聞く姿は真剣そのものであった。梅採りの当日は、前日の雨が嘘のような素晴らしい快晴に恵まれた(写真4~6)。

梅の木の周りにブルーシートを敷き、その上に梅を落とし、思っていたより簡単に梅が木から落ちて学生たちは驚いていた。

作業中に梅農家の青木一世氏より農業のお話や、青木恵里子氏から農家に伝わる伝統料理などのお話を伺うことができ、学生にとってはまたとないフィールドワークの機会ともなった。この日取れた梅の総重量は約400Kgとなった。

この時、学生たち



写真4 小梅の収穫



写真5 小梅の選別



写真6 収穫された小梅

は、地産地消と授業では簡単にいうけれども、作物を収穫することは大変な作業であることを実感し、地産地消を実践することは大変困難であると痛感した、と述懐している。

3-2. ステップ

採った小梅を洗浄し、紫蘇も準備し梅干し作りを開始した（写真 7～8）。調理室や漬けた梅の保存場所の確保にも奔走した。樽に梅と塩と予め摘んでおいたシソの塩漬けを入れ、その後土用干しをして完成となるのであるが、何度もカビの検査を行うなど、学生も教員も眠れない日々が続いた。



写真7 小梅の洗浄



写真8 紫蘇の準備

学生たちは、「講義で梅干し漬けの作業を学んだ時には簡単な作業のように思えたが、それぞれの作業は大変であった」と感想をしたためた。「梅干しの一粒々に愛情をかけることが大切である」と、青木恵里子氏より指導を受けた学生は、「手作りの基本を学んだ」という。

今回のプロジェクトでは、約 100kg の梅を分けて頂き梅干しに加工したが、小梅の 100kg はかなりの量であり、学生たちは、当初「大量の小梅を見て正直手作業で梅干しを作るのは無理だと思った」という。「しかし、やっていくうちにやりがいを感じるようになった」とも後に述べている。これらのプロセスと学生たちの意識変容への導きは、青木幸雄氏をはじめ、多くの方々の支援がなければ達成することができなかった。

完成した梅はパックに詰め、学生自らがデザインし、ミタイ基金関係者の支援を得てパッケージ化された（写真 9）。これらは、2008 年 10 月～11 月に行われた相原ふれあいフェスタや町内の運動会、東京家政学院大学の学園祭である KVA 祭、ミタイ基金と共催でおこなったチャリティ・

コンサートなどで販売し、完売することができた（写真 10）。売上金のうち、経費を差し引いた収益金 46,637 円をパラグアイ農村の子どもたちに奨学金として送ることができた。



写真9 完成した幸梅ちゃん



写真10 お祭りにて販売

4. 学生たちの学び

学生たちは、これらの地球市民的实践授業に参加して、どのような感想を持ったのであろうか。教員である筆者からは、はかり知ることのできないものであるが、以下のような感想が寄せられた。

世界のどこかで学校に行けない子どもたちがいるということ、その子たちのために、少しでも勉強してもらいたいと思い、一生懸命ミタイズの活動をしてきました。自らの手でこしらえた「幸梅」は小さな幸せの粒として、世界にまで届くことができればと心から思います。

梅干し作りは何もかもが初体験でした。山の木に登って採った小梅はとてもかわいくて、その小梅が月日を経て「幸梅」になり、たくさんの人に食べてもらえると思うととても嬉しいです。ミタイズの活動を通して、地域の方とのコミュニケーションやそれぞれの役割の大切さを学びました。パラグアイの子どもたちの就学支援のために少しでも多くの方にミタイズの活動を知っていただき、協力していただければと思います。

梅干し作りは、細かい作業が多く大変でしたが、完成したのを見るととても嬉しかったです。地産地消に貢献する活動ができ、本当に良かったです。

こんなに豊かで、何不自由なく暮らせる日本で、私たちは好きなことを好きなだけで生活しています。幸せなことだけでも、これが当たり前のことと思ってしまうようになります。このような生活をしていると忘れがちになるのが、心の豊かさなのではないかと思います。そんな（ものにあふれた）

飽和状態の日本と、パラグアイとの距離を、小さな活動かもしれないけれど、大きな私たちの気持ちで少しでも近づけたいと思っています。パラグアイの子どもの、明るくたくましく、力強い笑顔を増やすために、私たちにもできることがあると思います。

「幸梅」プロジェクトは、梅を採るところからパッケージデザイン、販売まですべてを手がけてきたものです。これは、自然に囲まれた東京家政学院大学多摩キャンパスだからこそできたことです。地域の方にもご指導・ご協力を頂き、楽しく作業をさせて頂きました。地域貢献から国際協力へとつながるこのミタイーズの活動は、初めてのことばかりで大変でしたがとてもやりがいがあります。学生のときに、この様な経験ができることはとても貴重だと思いますし、みんなで協力していいものができたと思っています。

授業を受け国際協力に興味を持つようになりました。最初は答えの出ない大きな（国際社会の）問題に頭を悩ませるばかりでした。まさか自分が国際協力を実際に行うとは思いませんでした。しかし、活動をしてみて、国際協力の幅の広さを実感しました。私たちの活動により少しでも多くの人に幸せを届けることができたと思っています。みんな同じ地球に生きています。地球上のみんなが平和であるように願うこと、行動することが、地球市民として生きる当然の行為なのではないかと思います。

一人では活動が限られてしまうことでも、多くの人が協力すればこんなにも大きな力になるのだとミタイーズの活動を通して思いました。以前私は、地球市民として生きるにあたって、自分にできることが見えませんでした。しかし、このミタイーズの活動に参加したことで視野が広くなり、できることが見えてきました。世界は日本で暮らす私たちのように豊かな人だけではないということ、助け合って生きていかなければならないということを知りました。自分にできることは意外にも近くにありました。このことを知ったあとは、行動しなければ始まらないと思います。一歩踏み出せば、私たちにはできることはたくさんあります。私たちの身近なところから、世界につながる機会

を与えてもらい、たくさんの方々の協力でこうして活動できていることに感謝しています。パラグアイの子ども達の力や希望になれるよう、これからも頑張っていきたいと思います。

その後、学生たちは、ミタイ基金とパラグアイ大使館、社団法人日本パラグアイ協会、かぶちゃん農園株式会社、生活協同組合バルシステム神奈川ゆめコープ、西武信用金庫などの協力を得て、町田市制 50 周年記念事業の一環としてチャリティ・コンサートを準備・開催するに至った（写真 11～13）。これらの一連の活動は読売新聞多摩版（2008 年 10 月 13 日）・東京新聞多摩版（2008 年 10 月 29 日）・朝日新聞（2008 年 11 月 1 日 補足資料参照）に掲載された。



写真11
チャリティ・イベントの準備



写真12
チャリティ・イベント当日



写真13
パラグアイ大使を囲んで

5. おわりに

箕浦は、1997 年に『地球市民を育てる教育』を出版した。20 世紀は国民教育の時代であった。21 世紀は、国民にかわって、地球市民がキーワードとなり、「世界に開かれた市民をどのように作っていくか」（箕浦 1997：10）が、教育の目的になる、と述べている。また、「21 世紀には、地球市民という立場から教育を再構築する必要性に迫られている」（ibid.：8）。その理由として、箕浦は、

- ・ 多国籍企業による経済活動や金融市場による世界一体化
- ・ 国際的な労働力移動と多文化共生

- ・衛星放送やインターネットにより、情報やイメージが瞬時に地球を駆けめぐる
- ・一国の人権問題が国際的課題になる
- ・地球環境問題、などをあげている。

環境問題、開発と貧困、戦争と平和の問題等、1990年代以降のグローバル化の深化の中、一国では解決できない地球的課題がより深刻になり、格差が助長されており、それらが自己責任という言葉により片づけられようとしている今日において、「地球市民」や「地球市民教育」という考え方はますます重要になると筆者は考える。

また、EPA にみられるように、国境の垣根が低くなり、モノ、カネだけでなく人の移動・移住が増加し、日本社会もさらに多民族多文化社会となってきた。このような現在の世界では、「市民」は必然的に「地球市民」にならざるをえず、地球市民を育てるための教育が必要になっている（山根 2008）。

本稿で紹介してきた筆者の地球市民的実践カリキュラムは試行錯誤の中、学生たちと作り上げてきたものである。学生たちの幸梅プロジェクトが、地産地消やフードマイレージの削減に貢献したのは、わずかであろう。また、地域おこしという名を借りた、学びの場を与えて頂いたのみかもしれない。さらに、パラグアイの子どもたちへの就学支援という実践は、開発の人類学などの視点からすると、オリエンタリズムの塊とみなされるかもしれない。それでも、このような思考と実践の萌芽を大切に伸ばしていくことでしか、地球市民社会を創造することはできないと考える。ひとりひとりの力は必ず世界を変えることになると考える。また、ひとりひとりが変わらなければ世界は変わらない。大学教育において地球市民的実践を支援することは今後の重要な社会の要請であると考えらる。

本稿では2008年度の学生たちの幸梅プロジェクトを中心とした活動の一端を報告するとともに、市民社会やコミュニティの関係、ソーシャルキャピタルの活用、学生たちの学びの形成のプロセスに関する理論的検証の積み重ねについては今後の課題としたい。

謝 辞

PCM Tokyo の仲間たち、惜しみなく学生たちにご指導頂いた青木幸雄氏、青木旦美氏、青木一世氏、青木恵里子氏をはじめ、相原地区でインタビューにご協力頂いた方々、新聞記事やHPを見て、そしてブログなどを通してミタイ基金やミタイ基金学生部ミタイズに声援を送って下さっている多くのみなさま方、そして学生たちの一連の活動を見守り続けて下さっているご家族のみなさま方には厚く御礼申し上げます。また、パラグアイの子どもたちに義務教育を贈ると学生たちの心が定まってからは、在日本パラグアイ大使館やNGO ミタイ（子ども）基金関係者の惜しみない協力を得ることができました（写真13）。

家政学の知を生かした「ジェンダーと開発」教材の開発が、具体的な地球市民的実践の第一歩につながりましたことに改めて御礼を申し上げますとともに、積み残した課題は今後も考え続けて参りたいと存じます。学生たちの地球市民的実践をこれからも見守って頂き、叱咤激励して頂ければ幸いです。

脚 注

- 1) 詳細は、藤掛洋子・大迫正弘編著（2008）『ジェンダー視点にたったPCM研修』、東京家政学院大学や藤掛洋子他（2008）「ジェンダーと開発教育—学部学生を対象としたPCM研修事例より—」、『東京家政学院大学紀要』、No.48：p.7-24 をご覧頂きたい。
- 2) ミタイとはパラグアイの先住民族の言語、グアラニー語で「子ども」を意味する。1995年にパラグアイ農村部の子どもたちの教育を支援するために設立したNGO組織。
HP：<http://www.yk.rim.or.jp/~yoquita/>
- 3) 滞在期限の上限は、看護師3年、介護福祉士4年
- 4) 卒業後、青年海外協力隊やNGOスタッフとして途上国で活躍する学生が毎年、1-2名いる。
- 5) 詳細は藤掛洋子編（2009）『地球市民として生きる：ジェンダー視点にたったコミュニティ開発』報告書：p.53-65に記載している。

文 献

- Elson, Diane and Pearson, Ruth (1981) 'Nimble Fingers
Make Cheap Workers: An Analysis of Women's
Employment in Third World Export
Manufacturing', *Feminist Review*, 7, p.87-107.
開発教育協会教材「パーム油の話—地球にやさしい
ってなんだろう」。
開発教育協会編(2003)『参加型学習で世界を感じ
る』開発教育協会。
Kohler, H(2002) 'Working for a Better Globalisation',
IMF Conference on Humanising the Global
Economy, Washington DC, January 28 2002.
北沢洋子(2008)「グローバルな金融危機と連帯経
済の展望」,『女性展望』, 11月号: p.14-15.
藤掛洋子・大迫正弘編著(2008)『ジェンダー視点
に立った PCM』, 東京家政学院大学(2007 年
度私立大学等経常費補助金特別補助教育・学習
方法等改善支援)。
藤掛洋子・大迫正弘・川畑雅之・久野叔彦・日和佐
綾(2008)「ジェンダーと開発教育—学部学生
を対象とした PCM 研修事例より—」, 東京家政
学院大学紀要, No.48: p.7-24。
藤掛洋子編(2009)『地球市民として生きる: ジェ
ンダー視点に立ったコミュニティ開発』, 東京
家政学院大学(2008年度私立大学等経常費補
助金特別補助教育・学習方法等改善支援)。
ヘンダーソン, ハーゼル他(石見他訳)(1987)
「実質的意味のない諸指標」エキンズ, ポール
(編著)『生命系の経済学』御茶の水書房:
p.39-48。
箕浦康子(1997)『地球市民を育てる教育』, 岩波
書店。
ミース, マリア(奥田暁子訳)(1997)『国際分業
と女性』, 東京: 日本経済評論社(Mies, Maria
(1986) *Patriarchy and Accumulation on a World
Scale*, Zed Books.)
スティグリッツ, ジョセフ・E.(榆井浩一訳)
(2006)『世界に格差をバラ撒いたグローバリ
ズムを正す』, 東京: 徳間書店(Stiglitz, Joseph
E. (2006) *Making Globalization Work*, New
York: W.W. Norton & Company)
山根俊彦(2008)『地球市民教育を学校現場に: 高
校教育への導入に向けて』, 清泉女子大学大学
院修士論文。
結城登美雄(2008)「背後に横たわる農村の崩壊:
農村に見る日本の貧困」,『メディア総研ブッ
レット貧困報道: 新自由主義の実像をあばく』,
花伝社: p.29-41。
(2009.3.27 受付 2009.5.20 受理)

添付資料 1

享月 日 新 聞 (夕刊)

2008年(平成20年)

梅干しで南米に奨学金

女子学生の手作りの梅干しが、地球の反対側の貧しい子どもたちを支える。南米パラグアイに奨学金を送ろうと、東京家政学院大(東京都町田市)の学生たちがサークルをつくった。資金づくりのため、地元で収穫を手伝った梅を丹精込めて漬けた。8、9日の学園祭で販売し、チャリティーコンサートも開く。(石田博士)



パラグアイの子どもたちを救おうと、女子学生たちは手作りの梅干しを地域のお祭りで販売した。ミタイ基金提供

町田の学生 農家手伝い学園祭で販売

東京家政学院大3年の志村多嘉子さん(21)は、大学の授業でパラグアイの子どもたちの悲惨な状況を知った。地方に暮らす子どもも多くが義務教育に通えないまま働く。売春を強いられる子もいる。村に医師がいなかったために幼い命を落とす子もいる。「同じ地球に暮らしているのにどうしてこんなに違うのか、と思った」

授業を担当した藤掛洋子准教授は「できることから始めてみよう」と提案した。

藤掛さんは同国に青年海外協力隊として滞在し、幼稚園を建設するなどした。帰国後は研究活動の傍ら、子どもたちを支援する「ミタイ基金」を設立して援助を続けている。ミタイは先住民の言葉で「子ども」という意味だ。

街 メガロポリス

Megapolis

志村さんたちは20人ほどでミタイ基金を支えるサークル「ミタイース」を結成した。5月には地元の農家の作業を手伝い、そこで得た約1000kgの梅を大学で梅干しにした。これまでに地域の秋祭りなどで売り、約4万円を得た。「最初は不安だったけど、やればできるんだと思った」

藤掛さんの目には、梅干しを売る学生たちの姿が、ともに活動したパラグアイの農村の女性たちの姿と重なった。「だれもが、自分の身近なところから世界をよくすることができ。そのことを学生たちに実感してほしい」

コンサートは同大の大講堂で8日午後2時開演。パラグアイの伝統楽器「アルパ」のルシア塩瀬さんやジャズサックス奏者の坂田明さんらが出演する。入場料は前売りが2500円から。問い合わせはミタイ基金(090・4096・2964)へ。

添付資料 2

(第3種郵便物認可)



メモ 福岡市出身。お茶の水女子大学大学院の博士後期課程修了。JICA国際協力総合研修所客員研究員を経て、2004年から東京家政学院大准教授。横浜市在住。ミタイ基金の問い合わせ番号は☎042・782・0948。

ミタイは、南米パラグアイの先住民の言葉で「子ども」を意味する。貧困で義務教育さえ受けられない村の子どもたちを支援しようと、基金を創設して、14年がたつ。現地では洋子の発音が難しく「ジヨウコ」と呼ばれ、慕われている。

南米の貧しい子どもたちを支援するミタイ基金代表

藤掛 洋子さん

「小さい時から、困っている人の役に立ちたいという思いを持っていたが、なかなか行動に移せなかった」
一念発起し、青年海外協力隊に志願した時は27歳で、すでに結婚していた。前年に、アジアやアフリカを旅行した時、貧民街の悲惨さ、物ごいの多さを間近に見て、決断した。「『やれるだけ、やって

人助け パラグアイで実現

みたら」と快く許してくれた夫には、今でも感謝している」と、ほほ笑む。

派遣終了後は、国際協力機構(JICA)や、お茶の水女子大学大学院で、開発援助の効果に関する評価法を研究した。

ひと十字路

生活改善運動に取り組んだパラグアイの農村女性を対象に、農作物の収穫量の増加といった量的な指標より、家庭や村での女性の発言力の増加といった質的なものを重視する方法を考案。国際開発学会などで発表し、注目された。

昨年は、仲間たちの支援の輪が広がり、基金が飛躍した年だった。東京家政学院大学(町田市)のゼミで教えてい

る学生たちが、基金の応援団「ミタイーズ」(21人)を結成、町田特産の梅で漬けたチャリティー梅干しを製造・販売してくれた。また、同大で、パラグアイハープ奏者を招き、初のチャリティーコンサートを開催した。好評だったため、今年2、5月には、同大千代田キャンパスでコンサートを予定している。

研究者と基金代表という二つの顔を持ち、忙しい生活を送るなかで、保育園児の長男の相手をするのが癒やしになっている。「宝物の息子と過ごす時間をどのように抽出すればよいのか、日々、試行錯誤」と、自らのブログにつづる。帰宅が遅いため、夜の公園で、母子でブランコに乗り、星空を見上げて語り合うことが多い。(三浦岩男)